

新 シリーズ

帰国研修員からの報告 <その1>

国際耕種は 2001 年から JICA 筑波での野菜分野や陸稲分野の研修を受託している。1970 年茨城県県内原に設立された内原国際農業センターからはじまった野菜分野の帰国研修員の累計はおよそ 900 名におよぶ。そのうち 149 名の野菜分野の研修員と 61 名の陸稲分野が我々の実施した研修に参加している(2012 年 10 月現在)。「遠くて近い国の友人たち」(AAINews No. 70 - 72 号)でアフリカ研修員の帰国後の活動について報告したが、帰国していった研修員から届く便りと写真でかれらの動向をこれからも不定期で伝えていく。

Emmanuel Odama さん(ウガンダ)

2010 年陸稲品種選定技術コースを修了したかれは、ウガンダ国北西部にある国の地域試験場、アビ農業研究開発研究所で研究員をしている。この試験場が管轄する北西部は 15,903 km²、450 万人が住む 8 つの県からなり、農業に従事しているのは人口の 88.6% (女性:81%、男性:67%) である(2002 年国勢調査)。かれの主な業務はネリカ米の品種適応試験やその増殖、そして農家向け奨励イネ栽培技術研修だが、JICA 筑波研修の参加以前から JICA がウガンダで展開しているプロジェクトへの協力もそのひとつであった。帰国後は、コメ振興プロジェクト(PRiDe)の地方展開の活動にかかわっており、最近では北西部における陸稲品種と新規水稻品種の適応試験を実施している。



PRiDe との合同会議



収量調査のための乾燥



抜き取り調査



サンプルの初重量測定

ウガンダ北西部のナイル河西岸地域でのイネの生産と品質が向上し、農家にとってコメが主要な栽培作物として受け入れはじめていますといま実感している。

Amjad Hussain Shah さん(パキスタン)

2006 年野菜栽培技術 II コースを修了したかれは、パキスタン国イスラマバードにある食料省種子検定・登録局中央種子検査所品種純度検査室室長として勤務している。JICA 筑波研修から戻って 2009 年まで、農業研究センターの輸入したトマト、カリフラワー、キャベツ、ニンジン、キュウリ、スイカ、カボチャの栽培試験を担当し、遺伝資源としての評価、適応性を検定してきた。その後中央種子検査所に異動し、室長として種子の品質検査(品種純度検査、発芽率検査、種子伝染性病害検査などの種子検査)にかかわっている。



ISTA 規定に基づいた種子検査



品種純度検査

訪問者への施設見学

種子検定・登録局は種苗法に基づき 1976 年に設立された。その主な業務は、パキスタン国内の栽培作物の種苗の品質検査をおこない、公的機関あるいは民間で育成された品種を登録することである。また中央種子検査所は国際種子検査協会(ISTA)に加盟しており、ISTA の定める国際種子検査規定にしたがって、パキスタンで栽培されている種子を検査している。かれの今もっとも関心のある事項は国際種子検査証明書発行で、ISTA 承認検査所としての認可をえるべく 2013 年 12 月を目標に手続き中である。

(小野記)

マメ知識: JICA が実施する野菜分野の本邦研修の歴史は 40 年を超えた。1970 年、茨城県内原にある内原国際農業研修センターで JICA 直営コースの「やさい」コースがはじまる。1981 年、つくば市に筑波国際農業研修センターを開設し、1996 年に筑波国際センター(JICA 筑波)となり、現在もここで野菜分野の研修が JICA 委託コースとして実施されている。